

まとめてアバヨを
云わせてもらうぜ



渡邊 浩一郎

まとめてアバヨを
云わせてもらうぜ



渡邊 浩一郎



渡邊浩一郎。1959年4月5日東京生まれ。小学校時代はブラスバンドでトランペットを、中学校時代は音楽クラブでヴァイオリンを演奏。当時好んでいた音楽はクラシックとジャズらしい。「子供の科学」や「初歩のラジオ」を愛読、機械いじりが好きな「ラジオ少年」でもあった。1976年春、京都に転居。高校入学当初は音楽よりもむしろ映像関係に興味を抱き、8ミリ映画やスライドを制作していたが、次第にジャーマン・ロックから現代音楽まで含む幅広い「実験的な」音楽に傾倒。ヴァイオリンのほか自作のシンセサイザー等の演奏者として「まだ」、「ウルトラ・ビデ」等のバンドで活躍。1982年春に東京に戻って以後も、様々なセッションやバンドに参加。ヴァイオリンをはじめドラムスやユーフォニウムも演奏。最後に在籍したバンドは工藤冬里率いる「マヘル・シャルル・ハッシュ・バズ」だった。1990年8月12日死去。

* *

昨年の8月12日、渡邊浩一郎は古今東西、玉石混交の膨大なレコード・テープ類を残して一足先にイッちまいました。数人の友人達の手で整理された彼のコレクションの中には、京都でのウルトラ・ビデ参加前後以来の演奏活動を記録したテープも残されていました。あまりにも一方的だった彼との別れに、彼の演奏を集めたCDをつくることで「まとめてアバヨ」を言いたいと思います。(下略)

1991年4月10日

(本CD制作呼び掛けチラシより。文：新井“テリー”輝久)

* *

ザッパを聴き始めてもう20年以上になる。その間にザッパを通して友人になっていった人が何人

かいる。その中の一人だった渡邊浩一郎が8月12日に31歳で自殺してしまった。

東京生まれの浩一郎が京都に流れて来たのは16歳の時だった。22歳で東京に舞い戻るまでの間、ウルトラ・ビデ、まだ・トートロヂカル・パフォーマンス等のバンドでヴァイオリン、彼自身のアイデアによる手製のリード楽器マルコリネット、ドン・プレストンばりの手製のオシレーターを中心としたエレクトロニクス群等を操っていた。ウルトラ・ビデというバンドは、現在、ウルトラ・ビデ・ニューヨークとして遠く離れたニューヨークの地で復活しているが、1970年代の終わりにアーク・サリー、イヌ、SSと共に関西ニューウェイヴ・シーンを形成していたバンドだった。かつてこのバンドには「花のパンク」(「俺達は金のためにやっているんだ」)、「メリー・ゴー・ラウンド」(「ランビー・グレイヴィ」)「アン・イヴニング・ウィズ・ワイルドマン・フィッシャー」といったザッパ関連のおほこ曲があった。これ等の曲をバンドに導入したのは、グループ名の名づけ親でもあった浩一郎だった。浩一郎が好んでいたザッパの音は「アングル・ミート」や「シーク・ヤブウティ」で多用されているリズム・カウンター・トラックと呼ばれる種類のもので、彼自身もリズム・カウンター・トラックもどきのテープ・コラージュをよく製作していた。今、彼が好きだった「アングル・ミート」アルバムを聴いている。才能には溢れていたが、それを飯の種にはしようとはせず、興味の赴くままに生き、アルコールと病気に耽溺し、もうつまらないやと死んでいった彼の冥福を祈りたい。

1990年9月26日(水俣病が公害病と認定された日)

谷口まもる

(フランク・ザッパ『ジャズ・フロム・ヘル』のMS1盤オリヂナル解説原稿の出だしの部分より、作品と直接関係の無い事は削除してほしいという発売元の要請により新たな原稿を作成したため、未発表)

* *

本CDの標題は、浩一郎がこよなく愛した安藤昇の歌「男が死んで行く時に」(阿久悠作詞/曾根康明作・編曲、'71)の歌詞の一節から採った。「お世話下さいました皆さん。/どうやら 今日明日でつきますようです。/最後の最後までお見捨てにならず/お叱り下さいましたことを/感謝致します。/……俺が死んで/泣くやつ千人 笑うやつ千人/知らぬそぶりが千人か……/それでいいんだ。/まとめてアバヨを云わせてもらうぜ。」

〔曲目解説〕

M1 歌謡曲せりふカットアップ / 渡邊浩一郎 (テープ編集) (27')

録音年月日・場所は不明。原テイクはもう少し長かったが、途中でカットアウトした。素材となったせりふが出てくる曲は：植木等「ホラ吹き節」('63)、谷啓「愛してタムレ」('63)、安藤昇「男が死んで行く時に」('71)、美樹克彦「花はおそかった」('67)(登場順)。浩一郎のクレイジー・キャッツへの思い入れは、彼が変名で書いた『植木さんたちのこと』というエッセイによく表れている。全文引用する：「初めてクレイジー・キャッツの映画を観たのは、もう20年近くも前の阿佐ヶ谷でだったと思います。えーと確か夏で、父親に金魚買ってもらって、阿

佐ヶ谷駅から青梅街道の方にててくてく歩いて行くと、植木等が例のウッシッシ笑してる看板が見えて来たのを覚えてます。映画の中身も忘れちゃって、シヤボン玉ホリデーのおじさんがいるな、と感じたぐらいのもんでした。/で、そんな事を急に思い出したのは、4年前前に京都のレコード屋でクレイジー・キャッツの新録音のLPを見つけた時で、歌は結構知ってましたから、植木さんの声とか、イヤー御苦労サンとかね、プアッと聴ってきて嬉しかったですね。/クレイジー・キャッツのレコードを初めて買ったのは小学生の時で、出来たばかりの萩窪友友の4階で「アッと驚く為五郎」を買いました。1人でレコード屋に入り出すようになってから4枚目のものだったけど、ゲバゲバ90分もそろそろ終盤に差しかかった頃で、ハナ肇がいつもの如く「アッと驚く…」をやったら、今迄ゲバゲバには顔出してなかったクレイジーの面々がテレビからバラバラ飛び出して来て、それは身長10cm位の小さな植木さんと谷啓が、この歌に合わせてコタツの上で馬鹿踊りを始めるというもので、もの凄かったです。/凄いやと言えば、「ニッポン無責任時代」の中で唄った「ハイ それまでヨ」のスイムとモンキーを混ぜ合わせたような踊りもえらくサイケデリックでくれたねえ。/「無責任時代・野郎」を封切り当時に観た或る人の話によると、映画の前のニュース映画で、カンカン帽にステテコ履ききょびヒゲの植木さんスタイルで出前をやるそばやのオヤジの話を紹介していたそうです。なんかその姿で自転車サーッと滑ぎ、「オーッス」とか何とか言ってそばを届け、ゲラゲラ笑いながら玄関先で踊って

いたということです。私がこの初期2本を観たのは、つい3年前前のことで、それまでは後期のものを中心に10本位しか観てなかったんだけど、今30本程のクレイジーのフィルムを見わたすと、やはり初期のものはプアッと元気が出てくるし、何度でも観たいですねえ。いや、ハッスルコーラですよ。/ともあれ、京都でクレイジーのLPを見つけた時から昔出たシングル盤探しを始めたんですけど、その頃は今ほど入手しにくいわけでもなく、50円~100円位で買えました。1枚見つける度に鳥肌立つような気持ちでした。でもねえ、その1年後に池袋で10インチの「植木等大いに唄う」を見つけた時は、べらぼうな値がついていて、ちょっとあれはねえ。/そういえば、「花のお江戸の無責任」で、植木と谷がハナの観分の命で、ボウリング場みたいな所で用心棒やられるシーンがあったけど、そこで流れていた音楽が、三味線をエレキギターに仕立て、8ビートのサーフィン物にアレンジしていたもので、カッコいいなー。こういうのも含めて多分萩原智晶が編曲してるんだろうけど、レコードになっていない挿入曲がたくさんあるわけで、オリジナルサントラ集とでも題して、東宝レコードは潰れちゃったみたいだから、東芝あたりで出してくれないでしょうかねえ、いや、どーも。」(1983年8月1日発行「パラレル通信 no.1」より)

M2 無題 / 東京スーサイド[渡邊浩一郎(rythm box, vn), 工藤冬里(el-g)] ('3'05')

1983年11月21日、成蹊大学(東京)の学園祭でのライブ録音。浩一郎の準備したリズムに合わせて即興的に作られた作品。バックに流れるラ

ジオの「演奏」は鈴木健雄による。「東京スーサイド」は工藤のバンドだが、命名は浩一郎による。M3 セッション4 / 渡邊浩一郎、藤原「ビデ」英則、藤本「ゲン」和男、中塚「野性の驚異」敬子、石橋正二郎、ペーさん、たかつちゃん、神吉来空、高田正宏、マセほか1名(3'24')

1978年6月18日、「BIDEガレージ・コンサート第3回 ~Ecological Music Event~」としてビデ宅ガレージ(京都)で行われた集団即興演奏の一つ(抜粋)。この日、浩一郎はel-g、テープ、8ミリほかを使用していた。その他は誰か何をやっているか判然としないが、ヴォーカルをとっているのは女性舞踏家神吉来空(かんき-らいくう、M25参照)である。「BIDEガレージ・コンサート」は、1978年4月から11月にかけてビデ・浩一郎・ゲン・野性・石橋により7回開催され、ビデのソロ・パフォーマンス、集団即興演奏、映画上映等のイヴェントが行われた。浩一郎は主として映像を担当し、自作の8ミリ作品(「flash」, 「3240」等)やスライドを映写していた。当時の浩一郎の自己紹介文：「1959年4月5日、東京で生まれました。/2年前より京都に住んでいます。/自分の行動が全て他人の轍を踏んでいるだけかもしれないと思い、力が抜けてしまうことがあります。おはり。」(1978年5月21日発行「ANON」(BIDEガレージ・コンサート月報)第1号より)

M4 イディオット・バスタード・サン / Multiplex ◎まだ [渡邊浩一郎(el-g)] (45')

データ不詳。テープのインデックスには演奏者名「まだ」と記入してあったが、実際は多重録音によるソロと思われる。テープ速度もやや上げてあるようだ。原曲は The Mothers of In-

vention の "THE IDIOT BASTARD SON" ('68年のアルバム "WE'RE ONLY IN IT FOR THE MONEY" 所収、作曲 Frank Zappa)。本テイクやM11から浩一郎のザッパ・フリークぶりが窺われる。

M5 五列節 / 渡邊浩一郎(syn) (2'05")

1978年某日、浩一郎のアパート(京都)にて録音。原テイクの中間部をカットして編集した。本人のコメント:「私はビデオ・ゲームやピンボール・マシンの上の『今月の最高得点者』のカードに名前が書かれることを、ある種のプライを持ちながらも、非常な喜びとしている。特に最近の音階の出るオシレーター内蔵のマシンは、あらゆる意味でオモシロイ。ゲーム・センターに行く時はテープ・レコーダーを持参する。自分のプレイを録音して、後でプレイ・バックしたり、編集したりすることは、サン・ラのシンセサイザー・ソロを聴くぐらいオモシロイ。演奏時間が長ければ長い程、得点も加算される。だからといって、ビスケットやハイライトがもらえる訳じゃない。何というバカバカしくて、ムダな作業だろう!」。コルグのモノフォニック・シンセサイザーで当時流行していた「風船割りゲーム」の効果音を模している。後年「YMOよりも早かった」と自画自賛していた。

M6 ミス・ニッポン / まだ [渡邊浩一郎(vo), 堀田吉範(vo)] (3'30")

1980年9月1日、堀田私室Y(京都市北白川)にて録音。原曲は戦前の日活映画『ミス・ニッポン』の主題歌で、二村定一が歌っている。「まだ」は基本的には浩一郎と堀田の2人組だが、その名称には幾つもの由来があるらしい(例:浩一郎が好きだった"mother(s)"や「マンダ」(東宝映

画「海底軍艦」等に出てくるムー帝国の守護龍)との発音的関連。「まるコ」(浩一郎の通称の一つ)の「ま」+「はった」の「た」+「・」など)。

M7 地下鉄新橋三丁目駅付近通路 / 渡邊浩一郎(per), 大塚正(ss), ヤタスミ(cl, vo), ゲソ(mini-syn, noise), 駅員2名(注意警告)(1'07")

1981年1月18日、現地における即興演奏を録音(抜粋)。

M8 やんやややん / まだ [渡邊浩一郎(ds), 堀田吉範(el-g), 正太郎(vo)] (3'54")

1981年8月15日、日比谷野外音楽堂「天国注射の昼」(東京)にてライヴ録音。「WHERE IS THE POLICE?」(ほぼド・ミ・ソの3音だけから成る Nisha Mengelbergの曲)のようなミニマムな曲として作られた浩一郎作品で、「まだ」の代表作と見られている。ヴォーカルの正太郎(まさたろう)は当時女子大生だったが、浩一郎の案により13歳の女子中学生という触れ込みでステージに登場した。

M9 霧のカレリア / まだ [渡邊浩一郎(slide-g), 堀田吉範(side-g)] (2'30")

1983年3月18日又は19日、浩一郎の実家(東京)にて録音。3月21日の「Double Trouble」というイベント(吉祥寺「ぎやてい」)参加のための準備としてカラオケ・ヴァージョンを作製するに当たり、選曲過程で収録されたもの。原曲は The Spotnicks のヒット曲「KARELIA」('65)だが、作曲もしくは編曲者としてクレジットされている C. Kaparow はフィンランドの The Feenades のメンバー(リード・ギター奏者)だから、順序としては The Feenades 版「哀愁のカレリア」(原題「AJOMITES」)のほうが先行す

るかも知れない。本テイクやM22から窺われる浩一郎のエレキ・インストやサーフィン&ホット・ロッドへの関心は、彼の友人である堀田・谷口の趣味や、大瀧詠一の深夜ラジオ番組『ゴー・ゴー・ナイアガラ』('75年から'83年まで断続)などの複合的な影響によるものらしい。

M10 想い出の濱 / まだ [渡邊浩一郎(syn), 堀田吉範(el-g)] (1'29")

1979年11月13日、浩一郎のアパート(京都)にて録音。原曲は湘南のGSワイルド・ワnzの'66年の大ヒット(鳥塚繁樹作詞/加瀬邦彦作曲)。浩一郎がここで演奏しているシンセサイザーは、M11やM12で用いている電子楽器同様、子供向け科学雑誌掲載の回路図等を参考に自作したものである。京都時代の彼はこのほかにもマルコリネット(クラリネットのマウスピースとアルトリコーダーの下半分をつないだもの)等、自家製楽器を多用していたが、東京に戻ってからは余り使っていない。

M11 メリーゴーラウンド / 渡邊浩一郎(electronic device) (24")

1979年11月25日、Sound Box 共和村「ウルトラ・ビデ・コンサート」(京都)の冒頭におけるライヴ録音(抜粋)。ワンチップLSIを用いた浩一郎の自作電子装置による自動演奏。原曲「MERRY-GO-ROUND」は Frank Zappa が制作したアルバム「LUMPY GRAVY」('68)と「AN EVENING WITH WILD MAN FISCHER」('69)に収録されている。本ナンバーは「ウルトラ・ビデ」(M12)の主要レパートリーの一つでもあり、バンドによる演奏はLP「THE ORIGINAL ULTRA BIDE」(アルケミー ARLP-001, '84)で聴くことができる。

M12 若いこだま / ウルトラ・ビデ [渡邊浩一郎(oscillator), ビデ(vo, el-g), 広重「ジョジョ」嘉之(el-b), 富家大器(ds)] (5'00")

1979年9月3日、サーカス・サーカス(京都)におけるライヴ録音。浩一郎は自作の発信機を演奏。ビデ作詞/ウルトラ・ビデ作・編曲。

M13 まとめてあばよを言わせてもらうぜ / 渡邊浩一郎(大正琴, vo), 堀田吉範(大正琴) (1'28")

1979年11月1日、堀田私室M(京都市北白川)にて録音(抜粋)。「まとめてあばよを言わせてもらうぜ」は先述のとおり安藤昇の歌の一節に由来するが、「まだ」の変名、もしくはその変名によって録音されたカセットテープの表題としても用いられていた。これはその名称による最初の録音である。

M14 セッション・アット・マイナー / 渡邊浩一郎(syn), 工藤冬里(ds), ビデ(vo), 大里俊晴(el-g) (1'47")

1979年6月24日、「マイナー」(東京)におけるライヴ録音(抜粋)。「ふだんはただだからやっていたのに京都からお客さまという感じでいかにもセッションというかたちで段取りする人などいても何か偉くなったような気がした」(工藤)。

M15 レッド・アーミー / 東京スーサイド [渡邊浩一郎(vn), 工藤冬里(el-g, vo), 小堺文雄(ds)] (2'48")

録音データはM2と同じ。
M16 再びのバビロン / 渡邊浩一郎(vn), 小山景子(kb) (1'21")

1983年11月又は12月、小山宅(東京)にて録音。小山の作品。

M17 やんややん / まだ [渡邊浩一郎(ds), 堀田吉範(el-g), 谷口守(org)] (3' 18')

1981年4月22日, Studio BeeのB-Studio(京都)における録音(抜粋).

M18 アトランティス(カラオケ・ヴァージョン) / まだ [渡邊浩一郎(vn, mixing), 堀田吉範(side-g, p, rhythm-box)] (2' 55')

1983年3月18日から21日にかけて, 浩一郎実家(東京)にて録音. M9同様, "Double Trouble"参加のために収録されたもの. 原曲は英国のソングライターJerry Lordan作曲の"ATLANTIS"で, The Shadows 盤がヨーロッパでヒットした('63). 「まだ」の演奏はスウェーデンのギター・フリック Åke "HANK" Nilsson によるカバー・ヴァージョンに準じて採譜・編曲されたもの.

M19 バジュワさん / まだ featuring アーガー・バジュワ [バジュワ(vo), 渡邊浩一郎(accordion)] (2' 38')

1981年1月27日, 関西日仏会館(京都)にて Godard 作品「女は女である」・「中国女」を観た後, 居酒屋「翁」にて会食していた浩一郎・堀田・「ルーマン」広田充ほか1名に, バジュワという名のイラン人が歌を歌ってくれた. その録音に, 1982年春, 浩一郎が実家(東京)でアコーディオンをオーヴァーダブして仕上げたもの. 浩一郎の独断により「まだ」名義でコンピレーションLP『なまこじょしおせえ』(ピナコテカDS#0001, '82)に収録された. 浩一郎のコメント:「昨年の秋(注:記憶違いと思われる), 京大近くの飲み屋でベルシャ人のバジュワさんというひで一瞬ぱらいと出会い, 一緒に唄なんぞやった時のテープで, 彼の顔(TV『ズーム

イン朝』)に出てくるウィッキーさんそっくり)を思い出しながら編集したものです」.

M20 プログレホイホイ / 涙のラーメン・カルテット(高円寺支部) [渡邊浩一郎(vn), 市口章(kb), ゲソ(el-g), 小山哲人(el-b), 風巻隆(ds)] (2' 31')

1982年7月6日, スタジオJAM(東京)におけるライブ録音. ゲソ作品. 「涙のラーメン・カルテット」は谷口守構想による「全国フランチャイズ制バンド・チェーン組織」であり, 京都支部, 名古屋支部, 高円寺支部, 西荻支部(本テイクと同日同所に出演)が存在したはずである.

M21 真白き富士の嶺 / 渡邊浩一郎(vn, per, mixing), 3C123(vn), 西村「タッキー」卓也(el-b, チャラメラ, vo), 工藤冬里(p, recorder), 大塚正(per), 竹田賢一(大正琴)] (1' 53')

1983年4月, 3C123宅(東京)にて録音. 劇団「風の旅団」の劇中歌のためのカラオケとして演奏されたものだが, 結局採用されなかった. アメリカ人Gardenによる原曲(1850)に, 1910年ボートで遭難した退子開成中学生を追悼する歌詞(三角鯛子作詞)が付けられ歌われて以来, 類似の海難事故が起きるたびにリバイバルしたという. また, 朝鮮でも同じ曲に説教調の歌詞が付けられ「希望歌」(フィマング)として三一運動時代に流行したという.

M22 ミスター・モト / 東京まだ [渡邊浩一郎(ds), 小山景子(el-b), タッキー(el-g)] (1' 55')

1984年7月2日, 氷島スタジオ(東京)における録音. これは浩一郎発案による東京版「まだ」の最初で最後の練習だった. 浩一郎は曲名に「へたくそヴァージョン」と付記している.

原曲は Paul Johnson & Richard Dalvy 作曲のサーフィン&ホット・ロッドのスタンダード.

M23 ソドムの市 / まだ [渡邊浩一郎(vn), 堀田吉範(el-g), 池田巧(el-g, electronics), 美川俊治(electronics), 高山「イデオット」謙一(vo)ほか] (2' 53')

1980年11月27日, 同志社大学S24教室"Noise for Euthanasia(変態毒音波展)"(京都)におけるライブ録音(抜粋). 原曲はEnnio Morriconeの作品(正確な曲名は不明)で, P.P.Pasoliniの映画"Salò o le centoventi giornate di Sodoma"(邦題「ソドムの市」, '75)の主題曲. この曲が「まだ」のレパートリーに加わるきっかけとなったのはM27の後半にも関係する「いろいろ」のBahama ライヴである.

M24 ソドムの市 / 渡邊浩一郎[vn, vo] (3' 07')

1983年2月27日, Dee Bee's(京都)におけるイヴェント「インスピレーション・クラブ」のライブ録音から. 朝鮮民謡とおぼしき旋律が部分的に挿入される. 「一つのヴァイオリンで用が足りるならば, 二つは使用しないこと」(浩一郎が敬愛していた R. Bresson のコメント).

M25 「ミュージック・フォー・マテリアル」より / 午後の網目 [渡邊浩一郎(vn, syn, mix), めぐみ(el-g, syn, strings, sequencer)] (3' 24')

1978年9月, 左京区真如町浄土寺のスタジオ(京都)にて録音. 梅林俊彦の8ミリ作品"MATRIAL"のサウンドトラックとして作られた5曲のうちの2曲目(抜粋). 同フィルムは, 同月17日の"BIDEガレージ・コンサート ~Come test the film~"において上映された. 「午後の網目」"THE MESHES OF THE AFTERNOON"というグルー

プ名はアメリカの女性映像作家 Maya Deren の同名作品('43)に由来する. 浩一郎とめぐみ(元シスターM)のデュオだが, ライヴでは神吉米空(M3参照)も加わった.

M26 「意地と喧嘩にゃ負けないが恋と情にゃめっぽう弱い鉄砲マドロス小意気な「まだ」のあくまでもささやかそうに見えるかもしれないトロジーカル・ライブ・パフォーマンスさ」より / 渡邊浩一郎(oscillator), 池田巧(?) (2' 06')
標題のパフォーマンスは, どちらかすとあ(京都)を借りて1980年5月2日に開始され, 最初のうちは週2回(主に火曜・金曜), 半年ほどして多少ペース・ダウンして週1回(主に土曜)行われ, 時折中断することはあっても, 約1年は確実に継続した. 主な参加者は浩一郎, 堀田吉範, 美川俊治, 池田巧, 「ルーマン」広田充, 高山「イデオット」謙一, 谷口守, 風巻隆. 本テイク(抜粋)の録音データは不明確だが, 浩一郎と池田(故人)のデュオと思われる. 「使用器材等各人各様雑多. 表現論的レベルにおいて各自の衝動的意志・意欲・意向等尊重. 参加者相互における抑圧的かつ強制的介入は極力回避(のつもり)」(堀田).

M27 あゝ人生に涙あり / 前半: スコタ[演奏データ不詳], 後半: いろいろ [渡邊浩一郎(lead-g), 堀田吉範(side-g), 猪狩亘(ds, vo), 佐藤利隆(el-b)] (4' 04')

前半は1980年7月19日, 氷島スタジオ(東京)における録音. 後半は1980年8月26日, Bahama(大阪)におけるライブ録音. 2曲をつないで編集したのは浩一郎. 「スコタ」はメンバー不明だが, 浩一郎主宰のセッション・バンドと思われる

る。「いろいろ」は美川俊治の仲介により実現した「まだ」と「NG」の合体バンド。原曲はTBSテレビ「水戸黄門」の主題歌(山上路夫作詞/木下忠司作曲/池多孝春編曲/歴代助さん・角さん役俳優歌)。

M28 レッツ・ゴー役立たず / 私たちの演奏[渡邊浩一郎(vn, vo, 歌唱指導), 3C123(cl, vo), タッキィ(el-b, el-g, チャラメラ, 膝印き), 工藤冬里(tb), 中崎博生(euphonium), 桜沢友里(accordion), 鈴木健雄(tp, vo), 熊井和恵(vo), 高田洋介(vo), 野村麻里(vo), 高橋朝(チヤング), 白石幸紀(vo), 白石夫人(vo), 杉山朗子(vo), 浅野ゆう子(vo)] (5'22")

1984年7月、タッキィのアパート(東京)にて録音。「私たちの演奏」は本来は3C123主宰の「音楽」教育機材通販組織だという。メンバーは流動的。韓国のチョ・ビョレゴルという人が作曲した「ナンチョンマルモラッソス」(「私は本当に知らなかった」の意らしい)に3C123がオリジナルの歌詞を付けたもの。

M29 ◎の黒犬 / マヘル・シャラル・ハシュ・バズ [渡邊浩一郎(vo), 工藤冬里(el-g), 中崎博生(euphonium), 高橋幾郎(ds), 三谷雅史(el-b)] (1'42")

1989年1月14日、京都こども文化会館小ホール「なしくずしの共和国」におけるライブ録音。LP "JANUARY 14th 1989 KYOTO Maher goes to gothic country" (オルグ ORG 006, '91) に収録。作曲と曲名は工藤によるが、歌詞は浩一郎が安藤昇の'76年の歌「黒犬」(唐十郎第1回監督作品 任侠外伝「玄海灘」主題歌。唐十郎作詞/田山雅充作曲/高田弘編曲)の冒頭の次の

語りを念頭に即興で歌ったものらしい。「おい、糸のないギターを弾いてくれ。/……—あの犬がやってくる前の、東の間に、早いとこ弾いておくれよ。風があっちからこっちへ吹いてくるちょっとの間だよ。黒いゴワゴワとしたあの毛が、風に運ばれてくるその前に、胸もとろける一節を……。」

M30 ニルリリヤ / 涙のラーメン・カルテット(高円寺支部) [渡邊浩一郎(vn, vo), 市口章(kb), ゲン(el-g), 小山哲人(el-b), 風巻隆(ds)] (3'51")

録音データはM20と同じ(抜粋)。朝鮮の代表的な民謡の一つ。浩一郎は韓国への関心が強く、'83年以来3度にわたって渡韓している。

M31 やんなっちゃった節 / 渡邊浩一郎(vo, vn) (15")

1980年8月26日、御津八幡神社境内(大阪)における録音。「いろいろ」のライブ(M27)直前の練習の合間に演奏されたもの。牧仲二自作自演による原曲はウクレレの弾き語りだが、これはヴァイオリンの弾き語りである。

(以上文責ゲン。文中敬称略)

* * *

制作・監修: 新井"テリー"輝久・小山哲人・鈴木健雄・高田洋介・西村"タッキィ"卓也・藤本"ゲン"和男・美川俊治

協力: 渡邊博行・堀田吉範・谷口守・新井康則・石橋正二郎・井上誠一・岡崎豊廣・金田一"3C123"ヤクスミ・工藤冬里・倉本高弘・郷坪浩子・小堺文雄・小山景子・佐藤隆史・三瓶英一・柴山伸二・高山"イディオット"謙一・広重"ジョジョ"喜之・"ルーメン"広田克 1991.8.12



CS5945-90812

まよびてアバヒをわせてもらなせ

渡邊浩一郎



CS5945-90812

まよびてアバヒをわせてもらなせ

渡邊浩一郎

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

渡邊浩一郎メモリアル・アルバム
全31トラック収録

¥2,800
(本体価格)

まとめてアバヨを云わせてもらうぜ

渡邊浩一郎



1981 SPRING



1984 WINTER



1989 SPRING